

議事録

会議名	令和6年度第2回久留米市子ども・子育て会議 青年期部会
日時	令和6年10月25日（金）19：00～20：25
場所	久留米市本庁舎3階 302会議室
出席者	内山委員、大西委員、幸若委員、早淵委員 山下委員、渡邊委員 6名
欠席者	國武委員 1名
傍聴者	1名
次第	1 開会 2 報告 （1）こども・若者ワークショップの実施結果について【資料1】 3 議事 （1）（仮称）久留米市こども計画（骨子案）について【資料2】 4 その他 （1）次回以降のスケジュールについて【資料3】 5 閉会
	1 開会 久留米市子ども・子育て会議条例第9条第4項の規定に基づき、会議成立
委員	2 報告 （1）こども・若者ワークショップの実施結果について 〈資料1について事務局説明〉 〈質疑応答・意見〉 子ども達は閉塞感を感じていると思われる。自分たちの子ども頃には、このようなことで悩んでいなかった。もっと子どもが自由に伸び伸びとできる環境を作ってあげたいと考えている。
委員	「P.5 テーマ⑧」の『相談していいと言われても相談できない』という意見があるが、家庭の中で両親にゆっくり話を聞いてもらえなかったり、学校にいてもなかなか自分の思いを伝えることができなかったりする。このようなことがこの意見に詰まっていると感じる。
委員	子どもにとって「たくさん話を聞いてもらった経験」や「褒められる経験」が、逆境を乗り越えるための力、レジリエンスを育む要素になるということを本で読んだ。そうした経験を持ってない子どもが増えていると感じており、大きな課題であると思う。

委員	高校では、様々な相談先を生徒へ紹介しているが、どのくらい利用されているのか分からない。学校の先生方は忙しく、業務に追われているため、なかなか子どもたちと向き合って話をする時間が取れない。子どもたちは先生に声をかけていると思うが、先生が業務をしながら話を聞くと、相談したのに聞いてもらえなかったと感じることがあるのではないかなと思う。現在、中高生は相談先がないため、SNS で知らない人と繋がっていることが多い。相手がどんな人か分からないが、逆にそれが安心できると感じている。相談できる場所や人が存在することは、子どもたちの成長にとって非常に重要であり、地域でそのような環境を作ることが大切であると思う。
委員	各校区に 1~2 人程度、子どもの話を聞いてくれる高齢者が居れば、あとは小さな部屋を一つ用意して、学校とは切り離された環境で、いつでも子どもが入っていける場所を作ることが必要である。そうした形を整えなければ、子どもの相談を教員だけで対応することは難しいと思う。
委員	小学校の昼休みを利用して、子どもの話を聞く取り組み「にじトーク」があると聞いたが、それはどのようなものか教えてほしい。
事務局	小学校に NPO 法人「にじいろ CAP」のスタッフが出向き、多目的ホールなどに段ボールで基地的なものを作ったり、ぬいぐるみを置いたりして、昼休みに子ども達に来てもらう。スタッフから聞くのではなく、子どもが話してくれるのを待つ取り組みである。子どもが話してきたら、そこから会話を繋げる形をとっている。最初はしゃべらなかった子どもが、1 年後に自分の困っていることを話すこともある。現在は試行的に行われているが、子どもたちには好評だと評価されている。
委員	「相談を受ける」という形ではなく、子どもが相談することを「待つ」スタイルでありながら、「きちんと見守っています」とも伝える形式である。子どもたちが構えてしまうことなく、求めているのは何気ない会話の中から子どもたちの葛藤や不安を感じ取ることであると思う。相談窓口は充実してきているが、地域の日常的な人たちがいて、子どもたちが話している様子を見守っているような環境が必要だと考える。
委員	テレビの特集で、委員が「まちの保健室」を開いているのを拝見した。相談に来る子どもが多いのか、それとも話をしに来る子どもが多いのかを教えてほしい。
委員	「まちの保健室」は福岡市警固公園にて、月に 1 度、土曜日の 18 時から 21 時

	までの３時間行っている。先日は性感染症のことで相談されたが、スタッフに医師もいるため対応した。その大半は子どもたちの話を聞いているだけである。「ちょっと来てみた」と思う子どもが多い。夜回りも併せて行っており、集まっている子どもたちに「今日保健室やっているよ」「相談もできるよ」と伝えたら、「行ってみようかな」とか、別に相談はないけど面白そうだから来るような子もいる。子どもたちの感情や気持ちを理解しながら話をするを「まちの保健室」で行っている。
委員	「医療的なケアを行う保健室」ではなく、「子どもたちが過ごせる空間」が設けられていることが、子どもたちにとって良いことであると考え。学校の保健室をそのような空間にする場合、保健室の業務ができなくなるという問題があるが、生徒たちに居場所を学校の中に設けると、子どもたちは安心感を得ると思う。
委員	地域の高齢者の元気は、有り余っていると感じている。彼らが自分の孫ではなく、地域の子どものおじいさんやおばあさんとなる場を作っていくことが重要であると思う。
委員	学校の子どもたちに地域の方が接してくれることが望ましいと思う。現在、学校の子どもたちが地域の方から交通マナーについて叱られることが多いが、地域の方々に学校の中に入ってもらい、一緒に見てもらうと視点が変わると考える。子どもたちも安心感を得られると思う。
	３ 議事 (1)(仮称)久留米市こども計画(骨子案)について <資料２について事務局説明>
委員	〈質疑応答〉 基本目標の中に「子ども、若者の権利が保障されるまちづくり」とあるように、子どもたちの意見が反映されて「自分たちが認められている」と感じられる社会づくりが重要であると考え。今回、基本視点の１番目に権利の保障が謳われている点に非常に共感した。自分の意思を表明したことがきちんと受け入れられ、「自分たちもまちづくりに参画している」という意識を持ってもらうことが広がっていくと良いと思う。
委員	「ここに来たら、自分を受け入れてくれる場所」がとても重要なポイントになると思う。
委員	子どもが安心することはもちろんであるが、子どもを受け入れるべき大人が忙

	しく、子どもとしっかり関わることが難しくなっている。そこを一緒に改善できるとすれば、子どもにとっての安心につながると思った。
委員	大人がどうあるべきかを問われているのだと感じる。仕事の関係で物理的に時間を確保できないこともあるため、大人への支援やサポートも計画に盛り込む必要があると思う。
事務局	「資料 2-1、P9 (3)」に「子育てと仕事の両立の促進」とある。ワークライフバランス、あるいは働き方改革とも言われているが、まだ課題が残っているため、引き続きしっかり取り組んでいきたいと考えている。
委員	ワークライフバランスについても考えていく必要があるが、昔の家庭にはおじいさんやおばあさんがいた。そのような家庭が今は少なくなっている。その中で両親だけに子どもを見ろと言っても限界がある。昔の家庭におけるおじいさんやおばあさんの役割を誰かが担ってくれば良いと思う。お父さんやお母さんが忙しいのであれば、近所の人や「おいで」と呼んでくれるような社会になることが近道だと思う。お父さんやお母さんも子どものことに一生懸命にならないといけないが、やはり忙しい。疲れて帰った際に子どもに声をかけられても十分な余裕がないのは仕方ないことだと思う。元気な高齢者に協力してもらう仕組みを作る必要があると考えている。
事務局	今回の新たな視点としては「こども若者の居場所づくり」を考えている。すでに行われている取り組みとして「子ども食堂」がある。「子ども食堂」はボランティアの方々に担ってもらっていることが多いが、その中でも高齢者の方が大部分を占めているのが現状である。委員が言われたように、退職後に時間がある方が善意で行っていることが多い。「子ども食堂」のように、実際には子どもたちの居場所になっている事例もあるため、どのように行っていくかは様々なやり方が考えられると思う。元気な高齢者に協力してもらいながら取り組みを進められないか、行政としても考えている。
委員	様々な世代の人々が多様な立場で、多くの役割を持つことが地域において重要であると思う。「子ども食堂」は、子どもを中心に据えつつ、大人がつながって子どもを支えようとする場が形成されている。その場では、おじいちゃんやおばあちゃんが食事を作り、子どもと関わるができる。おじいちゃんやおばあちゃんにとっても、そこが居場所になる。他の人々にとっても居場所となるような場所を作ることが必要だと思う。したがって、対象者を限定すると人々が集まりにくくなると思う。例えば「認知症カフェ」では、様々な人が関与しているが、対象者をあまり限定してしまうと利用が難しくなる。みんなが集えるような場所が

	必要であると思う。
委員	シンプルなものとして「声かけ」がある。高齢者の方も頼まれると「待っていました」とばかりに目を輝かせ楽しんでくれる。小学生や中学生とつながると、本当に嬉しそうにする。例えば、登録されているボランティア団体に対して、登録が「読み聞かせ」であったとしても、何か小学生たちのイベントがある際に行政から呼びかけてもらうことで、様々な年代を繋ぐ機会を提供できる。私たち自身も、誰かからお誘いを受けることが嬉しいものである。
委員	地域の方への声かけについて、行政が行うとハードルが高くなることもあるため、校区コミュニティからのアプローチが望ましいと考える。
委員	居場所はたくさんあるが、参加人数が定員いっぱいに入れないといったことはない。若いお母さんたちは仕事が忙しく、収入が少ないため、つながりを作るといよりも、目の前のことで精いっぱいである。おじいちゃんやおばあちゃんに話を聞いてもらうことがあれば良いが、子どもたちが、年齢が上がるにつれて引いてしまうことが増える。やりたいこととのミスマッチが起こるため、難しいと思う。各校区では「女性の会」を廃止しようとする動きがあり、様々なことをなくしていこうとする取り組みが増えている現状がある。すでに参加している人たちは積極的に出ていくが、大多数の人は不信感を抱いている。小さい頃から居場所とされるような場所に参加していない親子が思春期に不登校や引きこもりになると、いきなり居場所に行くことが難しくなる。これまでのつながりがないと、なかなか厳しいと思う。幼い頃から親子が集えるところが重要になると考えている。
委員	「切れ目のない子育て支援サービスの充実」が現計画の施策の方向性となっているが、親世代が孤立しているように感じる。さまざまな悩みがあっても、結局は家庭で解決しなければならない状況になっている。「切れ目のない子育て支援サービスの充実」として様々な事業があるが、そこに該当する人たちは良いが、該当しない人たちが多く、彼らは厳しい思いをしている。子どもに対しては様々な形で支援が広がっているが、親に対する支援は少ない。地域も含めた周囲がその点を上手に行っていけると良いと思う。
委員	「つながりは必要だが、しがらみのようなのは避けたい」と感じている人が多いのではないかなと思う。だからインターネットが有効であるかもしれない。インターネットは自分が使いたい時に使え、対面でのつながりは難しい。どのようなつながり方が良いのかは、この計画の中で考える必要がある。つながることが本当に良いのかということも問題であり、バラバラになるのも望ましくない。

	「緩やかに繋がる」とはどのようなものであるのかを、計画で具体化できると良いと思う。
委員	子どもが母親の愛情を感じられずに非行に走ったり、犯罪を犯したり、人の痛みがわからないといった状況について考えると、良くないと思う。地域との関わりが薄くなっているため、地域の方に近所の子どもに対して愛情を持って接してもらうことが難しい。ただし、愛情さえあれば子どもが非行に走ったとしても立ち直ることができると思う。思いやりの気持ちを育む活動ができれば、様々な面で良い影響をもたらすことができると思う。
委員	行政の様々な取り組みが存在するが、どこに相談したら良いのか分からないと感じている。ここに行くと言いつながってもらえるという窓口があれば良いと思う。最近では、死亡後の手続きを一つの窓口で対応できる仕組みができています。そのように、子育てをしている保護者向けの窓口があれば良いと考える。
委員	こども・若者ワークショップで出された意見では、子どもは学校にいる時間が長いので、学校に関する意見が多く出されていた。子どもが主体的に動けるような時間を学校でたくさん作る取り組みができれば良いと考える。地域の中で様々なタイプの学校を選べる仕組みがあると良いとも思った。
委員	おしゃべりをする場所が前提に挙げられていたが、そもそも「おしゃべり」というコミュニケーション能力が低下していると感じる。子どもたちだけでなく、親も低下していると思う。人との関わりが今後ますます重要になってくると思う。
	4 その他 (1) 次回以降のスケジュールについて <資料3について事務局説明> 意見なし
	5 閉会